

家庭科教育の昭和史とともに生きる—宮原小治郎伝

第一部 あるジャーナリスト の生い立ち (9)

佐々木 享

(名古屋大学教授)

望郷

小治郎は、一九〇八(明治四十二)年四月に、老父母と長女、長男を信州の家に残し、妻と五歳の次男を連れて京城に渡った。しかし数年後、病弱になった老父母の世話をするために、妻は次男と朝鮮で生まれたばかりの三男鮮三郎とを連れて信州へ帰った。したがって以後は今日言う単身赴任だったわけである。もっとも、次男は田舎での学校の学習には不満があったらしく、一九一五年秋に単身で京城の父のもとへ帰り、翌年京城中学校へ進学した。

小治郎は一九一五(大正四)年十月に、朝鮮各地への紀行文や和歌を収録した『朝鮮より』と題した小さな書物をまとめた。京城公立高女の同僚だった丸野竹南が挿絵を画いてい

る。定価五五銭。「自序」には「拙き文、つたなき歌、これ、皆郷国の知己友人に対し、予が近況を報ずるの家信に代えたるもの」とある。このなかで、

いかにして寝ねたまふらん病みませる

母のおもわのこひしくもあるか

病みませはなほいくたひかさかりるる

わか噂さをかなしたまふらむ

と小治郎は詠った。『朝鮮より』は望郷の書でもあった。

大正期の『家庭雑誌』と『裁縫講習録』

留守宅の長女が記した一九一五(大正四)年八月二十八日から翌年六月十八日までの「日誌」がたまたま遺っている。大正初期の農村の十七、八歳の少女の目に映った人づきあい、家業たる農業、家事、とりわけ糸とり、機織り、裁縫に多くの時間を費やしているさまが描き出されていて興味深い。留守宅では『婦女新聞』を購読していたほか、小治郎から毎月『家庭雑誌』『少年倶楽部』『裁縫講義録』が送られていたことも分かる。『婦女界』も購読していたようである。農村には珍しく多数の情報窓を持っていたと言えよう。

『家庭雑誌』と称する雑誌は、史上にいくつかわ知られており、いずれも、時の思潮によりそうように生まれ、消えていった。最初の『家庭雑誌』は、明治期の思想界に大きな影響力を持っていた『国民の友』の兄妹誌であり、徳富蘇峰を主

筆として、一八九二（明治二十五）年九月から一八九八年八月まで続いた。これは、「親子中心の『家』」に対抗すべき觀念である「夫婦中心」の「家庭」（西川祐子「住まいの変遷と『家庭』の成立」、女性史総合研究会編『日本女性生活史』第四巻、三一頁）をタイトルとした最初の雑誌であった。次いで、堺利彦を編集発行人とする同名の雑誌が、一九〇三（明治三十六）年四月から刊行された。発行当時の堺は、『萬朝報』の記者として日露非戦論の論陣を張っていた。やがて『萬朝報』が日露開戦論に転ずると、内村鑑三、幸徳秋水らとともに退社し、平民社を創立して『平民新聞』を発行したことはよく知られている。編集人・発行者は変動したが、この『家庭雑誌』は、一九〇九（明治四十二）年九月まで続いた。この『家庭雑誌』は、のちの社会主義者堺利彦の名と結びついているため、日本近代史では比較的知られている。小治郎の留守宅で購読していた『家庭雑誌』は、明治・大正期の出版・ジャーナリズムの雄として知られた博文館の月刊雑誌で、一九一五（大正四）年六月に創刊され、同名の前記二誌より大衆の性格を持っていた。また『少年倶楽部』は、野間清治の大日本雄弁会講談社（のちの講談社）が一九一四（大正三）年十一月に創刊した月刊誌で、のち『少年クラブ』と改題して一九六二年十二月まで続いた長命の雑誌であった。『婦女界』は、一九一〇（明治四十三）年三月に同文館から発行され

た婦人総合雑誌で、「婦女子に対して最も健全かつ多趣味なる読物を提供」することを目的としていた。のち発行所は婦女界社に変わり、一九五二（昭和二十七年）年十月まで続いた。

小治郎が送っていた『裁縫講義録』とは、たぶん、日本裁縫教育会が一九一六（大正五）年春から始めた『和洋裁縫講習録』を指すと思われる（戦前にはこの種の出版企画が多かった。筆者の手にある類似の他のタイトルのものとしては東京和服裁縫研究会の『裁縫講習録』全一四冊がある。しかしこれは、大正末と昭和初年のものである）。この『講習録』は、一九一七年三月発行の第一三号で完結した。各号に和服裁縫科、裁縫小物料、洋服裁縫科、袋物料、裁縫細工物料、洗濯色染科のような専門科目と称すべき科目と、国民道徳大意、教育大意、裁縫教授法のような教職科目と称すべき科目とが連載されている。執筆は、和服裁縫関係科目を共立女子職業学校の教師、洋服関係科目を大妻技芸女学校や女子美術学校の教師、教職関係の科目を文部省検定試験委員でもある東大、東京高師、東京女高師のスタッフが担当していた。各号とも一年以内に五、六版の増刷をしており、ひろく歓迎されたものらしい。

長女のためという直接の契機があったにせよ、後に自らジャーナリストとなる小治郎が婦人ジャーナリズムの動向に敏感であったことは興味深い。

『婦女新聞』社友となる

小治郎の『婦女新聞』への寄稿は、渡韓した一九〇八年四月から帰国する一九一九年九月までの間に、六七回に及んでいる。平均すると二か月に一度の割合である。その大部分は朝鮮半島各地へ出かけた折の紀行文で、教育論はふしぎなくらい一つもない。その日付から見ると、ほとんど休暇のたびごとに旅行に出かけていたようである。これらのうち一九一五（大正四）年六月までに寄稿したものの大部分は、修正の筆が入れられて『朝鮮より』に収録されている。

ところで、『婦女新聞』が毎年正月の第一号に掲載している社員、客員等の名による新年の挨拶を見てみると、一九一二（明治四十五）年正月に「客員宮原小治郎」の名の見えることが注目される。さらに一九一五（大正四）年正月からは小治郎の名は「社友」の欄に見える。単なる寄稿家以上に親しいものとして扱われるようになっていたと言えよう。

利川公立普通学校校長となる

一九一八（大正七）年七月一日、父が郷里で病歿した。享年七十歳であった。この年十二月五日、京城元町小学校校舎が焼失した。この夜、御真影（天皇の写真）と教育勅語謄本とは宿直員によりいち早く運び出された。しかしそれを知らなかった鈴木志津衛校長は御真影を案じて猛火の中に入って殉職した（『上田市史 下巻』一九七四年）。この事件は、

若本努によると、「御真影守護のために殉職した第三号」の

由である。（『御真影』に殉じた教師たち一九八九年）。

鈴木は一八七二（明治五）年上田に生まれ、長野師範卒業後県内各地の小学校に勤務一八九八（明治三十一）年より上田女子尋常小学校訓導、一九〇五（明治三十八）年七月から同学校長となった。当時の小治郎の勤務校のすぐ隣りにいたわけである。次いで小治郎より三年後れて一九一一（明治四十四）年四月に仁川高等小学校長に転じ、のち二校を経て一九一七（大正六）年七月から京城元町小学校長になっていた。同郷のよしみから小治郎は京城公立高女に入学した鈴木長女はるの保証人になっている。筆を去る四月にお元氣なはる氏を京都にお尋ねする機会があった。三、四学年の体操を習った由で、また裁縫室や割烹室に小治郎の姿を見たことはなかったとのことであった。

一九一九（大正八）年四月五日には、母のきちが七十一歳で亡くなった。小治郎は五十歳であった。この年五月二十三日、小治郎は同じ朝鮮の利川公立普通学校長に任ぜられた。

普通学校は朝鮮教育令に基づき朝鮮人に初等教育を施す学校で、当時は修業年限四か年であった。毎学年、朝鮮語の時間より日本語の時間の方が多く、朝鮮人の「同化」を目指す学校であった。一九一八年現在で、官立（総督府直轄）一三校、公立四六二校、私立二六校が設置されていた。普通学校

の校長には日本人訓導が任せられることになっており、訓導には朝鮮人が多かった。一九一八年現在の公立普通学校訓導について見ると日本人六九四名、朝鮮人一、六二〇名であった。

三・一 独立運動

小治郎が利川公立普通学校長に転ずる少し前、三・一運動と称される朝鮮独立を目指す大規模な民衆運動が始まり、年余にわたって続いた。全国二一八の市郡のうち二一七までにおいて、その土地に住む人々が何らかの行動を自主的に組織し、延べ参加人員は数百万にのぼったと言われる（梶村秀樹『朝鮮史』）。この困難な時期の公立普通学校長転出は、小治郎にとっても試練の時代だったに違いない。一九一九年の八月の殺気立つ状況を小治郎は次のように記している（『婦女新聞』第一〇一〇号）。

「一昨日来国辱記念日など、聞くも恐ろしき噂を耳にしたるのみか、ここにも彼所せしにも、銃劍敵めしき兵士の起るを見たり。殺気満都を襲ひ、人心恟々、風雨將に來らんとする今日卅一日、水原回り直通の自動車を駆りて利川に帰らんとす。友は途中の危険ならんことを恐れて、見合せよと忠告すれど、意を決して出で立つ」。

この途中の情景を次のように綴ってもいる（同上紙、第一〇一一号）。

「此里には珍しく一本の日の丸を見たり。いつもならばいぶせ

きヨボの伏屋までも打ち揃って祝意を表さぬものあらざるに、何すれぞ今日に限りて其意を表わさざる。咄汝は天皇節の祝日なることを知らざるか」。

祖国を奪われた朝鮮人の心情を十分に理解できないという点で、小治郎もまた在鮮邦人の平均的な見識の域を出ることがなかったと言えよう。なお右の記事に注釈を付ければ、八月三十一日は大正天皇の誕生日。ただし当時はこの日を「祝賀式をしない単なる祝日にとどめ、二か月ずらした十月三十一日を『天長節祝日』として盛大な儀式を挙行すること」としていた（佐藤秀夫『学校ことはじめ事典』）。

帰国

利川公立普通学校在任は一年足らずで、小治郎は、一九二〇（大正九）年四月二日には退職、帰国した。前年までに両親を失ったこと、長女の婚期も迫ったことが心を故国に走らせたであろうし、何より、朝鮮人「同化」を目指す普通学校の教育に自信と熱意を失ったのではなからうか。小治郎の退職に際して同僚だった朝鮮人が別れを惜しんで寄せた書が生家に遺されていることは、われわれには大きな救いである。

故郷に帰ったあふれるような喜びを小治郎は、
十年みぬふるさとしなのなつかしや

ああなつかしや見れどあかぬかも

と詠っている（『婦女新聞』第一一八〇号）。